

僕の母親は、東京に出て赤十字社の看護婦になったわけです。日露戦争の従軍看護婦になるためです。そのときもらった勲章とバルチック艦隊だけが唯一の自慢でした。

あとは、熊本的女性ですから政治の話が好きなんです。

小学校、中学校は朝鮮の京城です。だから僕はいろんなふるさとを持っていていろんなふるさとで錦を飾っています。

### 島者は雄飛する

京城中学から旧制一高にはいりまして、京城中学というのは朝鮮のナンバーワンの学校でして、昔は不思議なことに運動部の強い学校は勉強もうまいんですよ。今の学校はそうじゃないようですよ。名門校というのは受験名門校か、野球の名門校なんですね。あの当時、毎年一人位は一高にはいっていたんじゃないですか、僕らがいっていった時に熊本の済々齋からきたというのは一人もいなかったくらいですから、しかし熊本には五高がありましてからね、で五高の生徒はえらいなにかというところ、五高時代というのがあったわけで、それで一高の記事と五高の記事はよく似ているんですよ。私がいつ頃朝鮮に渡ったかよくわかりませんが、島者には雄飛する気風があるわけですよ。ナポレオンだってコルシカ島ですしね、

れでやめてしまったんです。今頃、文化勲章なんかもらった人もいますから、あるいは林健太郎、丸山真男なんかやがてもらうでしょう。俺も学校でいたらなあ、文化勲章なんかもらえたかもわからん、残念なことをしたと笑って彼等こそういっています。

それから一、二年して奈良の東大寺に行ったんです。その時に壇一雄というのが僕のところを訪ねてきたんです。それでここに秀才ありというんで大宰治をつけてきたんです。奈良の東大寺ではえらく歓待されました、仕事は何もしませんでした。実に愉快な十年でしたよ。

### 開発的人間

いよいよ戦争になって働かないわけにはいれないから、光学会社に働いたんです。学歴がないから臨時みたいなことをやっただけですが、社長から認められて、部長ぐらいにはなっていました。その間も作家活動は全然行いません、文学で飯をくおうと思っただけから、やめる機会があったらいつでもやめますから、だから光学会社で部長になつたりしたんです。文学青年にはなれませんが、そんなに社会はあまくないですからね。

芥川賞が「現代で最も開発的人間」は森敦だと書いています。それは会社に行けば会社でバリバリやるからです

だからどっか遠くへ行きたいという気持ちをもつてくっついていて思うんです。それを辛抱している奴は金持の息子か怠け者かです。それで、朝鮮、満州というのは、ほとんど九州弁で押えられていてなからず熊本県が主流になっていた。だから僕らも「ぼつてん」とか、そういう言葉は使わなかったけど、どこかアタセントとかイントネーションとかね、歴然として熊本の痕跡が残っていたんですよ、両親が熊本だからですよ。

### 専門家の記録

一高は面白かったですよ、英文科ですが、一高は文科とは言わないで、英法というんです。立身出世を重んじた奴がいたんですよ。その頃の学生生活はとても愉快でした。僕は腕力もありましたし、向こう意気が強いんですから、熊本の女性の性質、母親は熊本の女ですからね。運動というのは今みたいに専門化していませんよ、何でもやらざるを得ない、青びょうたんでない奴は柔道も強ければ、走るのもやれと、それが足腰を強めることになって、今でも柔道の人は走っているでしょう。水泳もそうです、でも当時の記録というのはおしなべて今みたいな専門家の記録じゃないですからね。あの専門家の記録というのは、限界を越しているんです。僕らは専門家の記録は要求

よ。文学だけでやったら開発的人間とは言わないんです。それで、「歴史的開発人間」は大村益次郎というんだから、大村益次郎と僕らしいんです。

森さんはいっこうに書きませんね、という人がおるんですが、書かないというんじゃない岩波の「世界」やなんかに書いておるんで、「女性自身」かなにかに書いておればみんな知っているんですよ。うけども。

### 希少価値

「月山」は賞をもらった四ヶ月位前に書いたんじゃないでしょうか。僕が十年働いては十年遊ぶという生活をしていましたから、それで、やめることは一高時代から天才ですから、月山の時には、僕は文壇的には孤独ではなかったんです。絶えず山に行ったり、山に作家が訪ねてきたり、編集者がきたりして、昔を思い出して、希少価値がありますから、僕に書かせようとして、いろんな人がやってきていたわけですよ。僕はホラをふく癖があるんです。大言壮語するんです、これも熊本人の血でしよう。「俺がやったら、そんじょそこの小説は書かない」と「そうだと思ってお訪ねしました」なんてことを言っています。

芥川賞は、候補になる前に大騒ぎになったわけですよ。あらゆる新聞で書きたて

されていましてから勉強も十分にやるわけですよ。

だから、今の高校生みたいに専門化した運動競技に比べたら、昔は強かったというのには嘘じゃないですか、ものすごく専門化し、合理化して、だから強いことは強いが、足が折れたりすることになるんじゃないですか。

### 勘違い

横光利一に師事したと言われるので、師事ではないということにしたんです。師事以上であつたかもしれないんです。誰にも生涯師事したことはないんです。横光さんの奥さんがよく言っていました。「横光さんがめずらしく大きな声を出して笑っていたら森さんが来ているなあ」と、だから師事なんかせんんです。僕の文学と横光さんの文学とこれ程違えば、文体から違うし、考え方が違えば全部違う、朝日新聞社発行の文壇意外史にはつきりできています。

当時、僕は師事したもしないも大体文学志望じゃないんですから、親父が政治やって食いつぶし、書家なんかで食っていたんですから、僕は将来何になるかというので「政治家になる」といったらものすごく喜んで、だから政治家になるつもりだったから文学なんて馬鹿にしていたわけですよ。今でも政治家は文学を馬

たわけですよ、それは僕が希少価値があつたということと、その道の女人は僕の名前を知っていたというところで、他の人よりは目をひいて、やる前から騒ぎになっていましたから。こういうこともあつたんです。昔は僕は芥川賞をもらえない人だといわれていましたから、なぜかというところ、芥川賞は新人にあげる賞ですから、ところが僕は大新聞に書いたりして新人ではなかったわけですよ。世間的には新人みたいにか見えないうけです。だから、ひょっとしたら芥川賞はいらんというかもわからんという議論があつたらしいんです。

そこで僕の考えは全く違っていたんです、勝負の土俵に出された以上は、勝負はせにやならんので、そこで負けようとは勝とうと仕方のないことなんだと、そればかりではなく、芥川賞をつかった人は菊池寛であるということ、それに対して僕は何んの拒否することがあるのかという事です。取材なんかしたことはないんです。月山には取材のために行つたんじゃないんです。書こうなんてさもない感情をもっていたら「月山」は書けんんじゃないですか。あるいは「鳥海山」を書こうと思つてちょこちょこつと行って書いたらそれは天才ですよ。壇ふみちゃんが僕とNHKで対談するために行ってきたんですが、近頃は一万人を超える参

鹿にしているんじゃないですか。

菊池寛は僕が京城中学の時に講演にきていまして、それで何かこっちは知つたような気持ちになって、あのテレビによく出ている人の顔をみると昔から知つたような気になって挨拶する人がいますね、あれと同じですよ。ところが、菊池寛の方は、小遣金なんかくれまますから喜んでおじゃましている僕を文学青年と勘違いしたんです。横光さんと川端康成という人は菊池寛のところへ居候していましたが、それで「君、つきあうなら横光君とつきあえ」ということなんです。

それで僕に何か書いてみないかというんです。書かしたのは菊池さんですけど、菊池さんの名前でも良かったんですけど、けれども、横光さんが推せんしているあの当時はきらめく存在でしたからね。ものすごく可愛がってもらったんですよ、それで僕は一高をやめたんです。その頃から毎日新聞に書かないかといわれていたんです。僕が口がうまいから、大体作家というのは口下手ですから、これが小説を書いたらどんな小説を書くだろうなんて思つておつた。片方では、いろいろ思想的なことなどで、こんな学校にいて知識勉強したって何になるかと、知識を捨てることこそ知恵に至る道であると想像もできないことを考え出して、そ

拝者があつてどうにもならんようですよ、今度映画になりますからね。

### 熊本の自慢

熊本について提言というのは格別ないですが、熊本に生まれたというのは宿命ですから、これに反抗してもしょうがない。フルに熊本の性質をひきだし、むしろ使つた方がいんじゃないですか。まあ、独立自尊というか、俺が俺という気持が強いんですが、反面、強きには弱いけど、弱きには強いんです。熊本人はモッコスだとか言ってますが、これは熊本が背負っている宿命、運命、歴史そういうものが、そういった性質をつくっているのじゃないか。それから、熊本の人、何が自慢かさっぱりわからんけど、東京にきても熊本弁を使つていばつていっているんですよ。だけど、がいて嫌らわれている県民じゃないですか、というのには、熊本だという時には、なんか熊本を自慢らしく言うもんです。自慢の根源は不知火海と有明海と阿蘇山だけなんです。熊本の人は覇気がある、その覇気を十分にいい方に使つてもらいたいと思つています。阿蘇と有明海しかないというけれども、阿蘇山はめずらしくいい山です。不知火海もいいですね。